

## 彫刻家が選ぶ、美術の本 15冊。

選者：砂川泰彦 | 沖縄県立芸術大学彫刻専攻教授、彫刻家


 県立芸大の  
先生が選ぶ  
おすすめ本！


池上英洋

## 『もっと知りたいミケランジェロ 生涯と作品』

東京美術、2017年

/702.37/I33/

今回、おすすめする本のはじめとして、ミケランジェロの生涯と作品を紹介している池上英洋著「もっと知りたいミケランジェロ」を紹介します。ミケランジェロはロダンと並ぶ、多くの人がある有名な彫刻家です。ミケランジェロの鮮烈なデビュー作品は「サンピエトロのピエタ」です。磔刑後のキリストを抱くマリアは幼児を抱えるように慈愛に満ち、命を失ったキリストの姿が、この場面をより悲しく表現されています。数年後に「ダヴィデ」を作ります。本書にはミケランジェロの歴史が分かるちょっとした年表が付いており、年齢ごとにどんな人生を送り、どのような作品を作ったのかが分かるようになっています。



ヴァザーリ

## 『ルネサンス画人伝』

平川祐弘・小谷年司・田中英道訳、白水社、1982年

/702.37/V44/

2冊目はヴァザーリ的美術家列伝です。その中でも白水社の「ルネサンス画人伝」を紹介します。先程の一冊目と同じ、ミケランジェロの部分を紹介します。ヴァザーリの「美術家列伝」の初版が出た時、ミケランジェロは75歳、この本に対してミケランジェロとどんなやり取りがあったのか気になります。文中からミケランジェロの作品づくりの裏側や人柄などを感じることが出来ます。

また、イタリアではヴァザーリが語るミケランジェロの映画「MICHELANGELO - INFINITO」が公開され、今後、日本での公開が楽しみです。本書には、同時代の素晴らしい画家（ラファエルロ、レオナルド・ダ・ビンチ、他）の紹介もあり、ルネサンスの作家を知る資料として貴重な一冊です。



上條文穂

## 『KAMIJO FUMIHO Works 2018 - 1977』

作品集編集委員会、2019年

/71/Ka37/

彫刻家 上條文穂が1986年から沖縄に大学教員として赴任し、2018年までの作品と東京時代の作品を集めた作品集です。紙を集積し、彫る立体作品から沖縄の素材や風景に影響されて変化する作品の変遷は作家の歴史であり、日本とアジアの狭間である沖縄という土地に立脚し、沖縄の土を素材としたセラコッタ作品が、宇部の野外彫刻展で受賞するなど、高い評価を得ています。上條が沖縄で取組んだ彫刻プロジェクト「街と彫刻展」(1992年開催)は、その後、展覧会名を変えて沖縄県内離島、台湾へと広がり、東南アジアとの交流を推進しました。また、国内外の芸術系大学大学院生が参加する「彫刻の五七五」展の企画を立案し、2006年から開催されて現在も続いています。その他にも彫刻普及のための活動実績を多く残しています。そんな上條文穂の彫刻家としての活動を知る一冊です。



**石鍋真澄**  
『ベルニーニ バロック美術の巨星』

吉川弘文館、2010年

表紙はベルニーニ彫刻で有名な「アポロとダフネ」です。恋をする矢を射られたアポロが美しい娘ダフネに恋をしますが、鉛の矢を射られたダフネは拒絶し逃げてしまい月桂樹へと変わってしまいます。その一瞬が大理石で彫られています。バロック美術の代表的な彫刻家ベルニーニを知る本として本書を推薦します。

/702.37/179/



**藤田観龍**  
『日本・石の野外彫刻』

本の泉社、2008年

北海道から沖縄まで、日本全国を訪れて、各地域に設置された石の野外彫刻を撮った写真集です。彫刻家470名、共同制作14点、作品約960点が掲載されています。藤田観龍氏の長年の取り組みの成果は野外彫刻の記録としても貴重な一冊です。

/714.087/N77/



**東京国立博物館(ほか)編**  
『始皇帝と大兵馬俑』

NHK・NHKプロモーション・朝日新聞社、2015年

漫画「キングダム」で描かれる始皇帝、群雄割拠の春秋戦国時代に中国史上初めて国を統一し、貨幣や計量単位を統一します。紀元前210年、数え年50歳で崩御し、その後、劉邦の漢王朝が統一します。そんな時代に作られた始皇帝の陵墓に埋められた兵馬俑の展覧会カタログです。帯鉤や俑の頭部の造形、水道管など必見です。

/222.041/SH34/



**小田原のどか編著**『彫刻1 空白の時代、戦時の彫刻／この国の彫刻のはじまりへ』

トポフィル、2018年

彫刻の社会性を考えた時、街の中に存在するモニュメントは彫刻家が社会と対面し、その対価を得るひとつの関わり方です。本書から、戦時中の公共彫刻の様子を知ることができ、鼎談から日本のモニュメント彫刻の歴史や問題提議など、彫刻家の社会的役割を考察することが出来る一冊です。

/710.8/O17/1



『上條文徳と波多野泉 現代彫刻展』

沖縄県立博物館・美術館、2019年

彫刻家として、沖縄県立芸術大学の教員として活動を続けてきた上條文徳、波多野泉の作品の展開を知ることができる沖縄県立博物館・美術館での企画展カタログです。沖縄に赴任する前の作品や、沖縄で出会った環境や風景、人などから生まれた二人の彫刻作品が並ぶ展覧会の写真集です。

K/71/O52/



**彫刻研究会編**  
『個我の形象展』

彫刻研究会、2012年

戦後、沖縄における美術の発表の場として「沖展」が生まれ現在も開催されています。その沖展会員として作品を追求している彫刻家の展覧会「個我の形象展」のカタログを紹介し、この展覧会は沖展会員である上原博紀、上原よし、富元明雄、友知雪江、西村貞雄が所属する彫刻研究会が主催する展覧会です。この展覧会のカタログは沖縄の彫刻を知る資料として貴重なと感じています。

K/71/C57/16



**土門拳**  
『土門拳の古寺巡礼』

池田真魚監修、クレヴィス、2011年

この写真集からは仏像彫刻の持つ圧倒的な存在感を感じます。仏像に向き合っているような緊張感がこの『土門拳の古寺巡礼』から伝わるのです。被写体である仏像から、その場所の気温、匂いなどを感じ、また、写真の中の仏像を彫刻として感じるができる優れた写真集です。

/748/D85/



**国立新美術館編**  
『安齊重男の“私・写・録”1970-2006』

国立新美術館、2007年

1970年から2006年の東京を中心に現代美術の現場を写真で記録した展覧会のカタログです。この写真集からはその当時の東京のアート状況を感じることができます。作品と一緒に作者が写り込んでいるなど、記録としても大変貴重だと思います。

/748/A49/



**宋應星撰**  
『天工開物』

藪内清訳注、平凡社、1969年

琉球王国時代の石碑、石獅子、石厨子はどのような石で彫られたのだろうか。その時、鉄はどこから輸入し、石鑿制作技術は中国からはいつてきたのか。ということ調べていた時に出会った本です。中国の明末に宋應星によって中国の産業技術の説明を、挿絵を用いて書かれている興味深い一冊です。

/080/TO82/130



**阿部謹也**  
『中世の窓から』

朝日新聞社、1981年

ヨーロッパ中世の職人の仕事や様子などが紹介されています。その中に石工が石道具を持って石を彫っている挿絵がありました。描かれていた石を彫る道具の片刃のつるはしを作ってみました。なるほど使いやすい。沖縄にも同じような石工道具がありました。この本には他にもいろいろな情報が詰まっています。

/230.4/A12/



**工藤晃**  
『議事堂の石』

新日本出版社、1982年

琉球石灰岩が国会議事堂の一部に使われていると新聞記事に出ていたので、国会議事堂の石に関する本を探し、見つけた本です。国会議事堂は日本全国から集められた名石で1936年（昭和11年）に完成しました。この本を読んだ後、実際に琉球石灰岩を見つけに国会議事堂に行ったことが思い出されます。

/511.42/KU17/



**舟越桂**  
『立ちつくす山 舟越桂作品集』

求龍堂、2001年

1992年から2000年頃に制作された木彫作品とドローイングの写真集。静謐な存在を纏った初期の作品から、展開され、変化していく形跡が分かる一冊です。日本が誇る木彫作家として、多くの彫刻家に影響を与え、現代を代表する彫刻家の一人である船越桂氏の作品を集めた本です。

/713/H98/